

文書館だより
ふみくら
文庫

第 30 号

2015年1月20日発行

藤 沢 市 文 書 館
〒251-0054 藤沢市朝日町12-6
TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172

藤沢市文書館

<http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/>



市役所を出発する聖火隊（広報アルバムNo. 24）

東京オリンピックの聖火ランナーは、トーチを持つ正走者 1 名と予備走者となる副走者 2 名、五輪旗を持つ随走者 20 名で構成されました。この走者は、当時神奈川県に設置された聖火リレー実行委員会が体育や競技会の成績を考慮のうで選抜し、正走者と副走者は 16 ～ 20 歳の男性、随走者は中学生から 20 歳までの男女にそれぞれ委嘱されました。写真は藤沢市役所前に設けられた中継点に向かう聖火隊の随走者で、先頭向かって左側は当時、藤が岡中学校 3 年生だった鈴木恒夫市長です。（澤内）

もくじ	
市役所を出発する聖火隊…………… 1	古文書の読み方…………… 4
「東京オリンピックとふじさわ」紹介… 2	編集後記…………… 4

2014年度収蔵資料展

「東京オリンピックとふじさわ」のご紹介

1964年の東京オリンピックは一部の競技を周辺各県で開催しており、藤沢市もヨット競技の会場になりました。藤沢市文書館ではオリンピックから50年の節目として、10月14日（火）から11月28日（金）にかけて収蔵資料展「東京オリンピックとふじさわ」を開催しました。

展示では、会場となった経緯や、藤沢市における準備、そして聖火リレーや競技そのものについて紹介しました。

1. 湘南港築港とオリンピック誘致

東京オリンピック誘致の前提となった湘南港の築港は、片瀬東浜の浸食対策からはじまりました。戦後、このことが問題化し、神奈川県が調査を進めた結果、沿岸流が原因であることがわかりました。そこで、対岸にある江の島を利用して護岸堤防を築くことになりましたが、当時、大分県の別府観光港の成功に触発された県当局は、1959年（昭和34年）に堤防を利用した築港計画を立案します。

当時の湘南海岸は代表的な海水浴場とされる一方で、冬季の集客が課題とされていました。そこで県は大島航路に着目します。当時、東京から伊豆大島

まで片道6時間半かかり、行きは夜行になりました。仮に江の島を起点にすると片道3時間に短縮できるため、鉄道との連携で日帰りが可能になります。これにより伊豆諸島への新しい玄関口として、年間を通じた集客が可能になると考えました。

さらに後押ししたのは、1959年5月23日に開かれた国際オリンピック委員会総会で、東京が第18回オリンピックの開催都市に選出されたことです。施設の都合上、一部競技は周辺各県で分催することになり、唯一の海上競技であるヨットは神奈川県に割り当てることが決まりました。当初は横浜での開催が検討され、横浜市は富岡海岸に新たなヨットハーバーを建設する計画を立てます。しかし、そこは米軍接収地で、池子弾薬庫と一体運用するため返還に応じられないとの回答があり、建設計画は挫折しました。

そのようななか、湘南港の計画が日本オリンピック委員会の目にとまり、ヨットハーバーをメインとする湘南港の建設が確定しました。そのため、県は湘南港の建設について、東浜の浸食防止、大島航路、オリンピック競技会場の一石三鳥の観光振興と謳ったのです。

分火リレーを終えて、
江の島ヨットハーバーに
点火される聖火
1964年（昭和39年）10月11日
（広報アルバムNo.23）



2. オリンピックを迎えるために

藤沢市は、会場都市として競技の運営、そして成功に対して重い責任を負っていました。市は 1962 年（昭和 37 年）1 月 11 日に国や県に呼応して、庁内に東京オリンピック準備委員会を設置し、受入れ体勢を整えます。プレオリンピックを通じて大会運営スキルを積むとともに、新設された藤沢市中央図書館（現・南市民図書館）のこけら落としとして、文部省や日本体育協会の協力のもと、オリンピック展を開催して市民の期待感を高めました。

3. 聖火リレーと分火リレー

東京オリンピックの聖火は 8 月 21 日にギリシア・オリンピアのヘラ神殿で採火され、9 月 7 日に沖縄に到着しました。聖火は島内を一周後、東京を目指して 45 道府県をくまなくリレーしました。藤沢市では 10 月 7 日の 11 時 30 分に市内に入り、1 時間かけてリレーしました。藤沢市内のコースは 7 区ありましたが、うち諏訪神社（二ツ谷稲荷神社）前～羽鳥バス停前の走者は、大和や相模原など、内陸部の自治体に割り当てられました。

オリンピックの開会式は 10 月 10 日に举行され、聖火は翌日、分火として藤沢市に帰ってきました。分火とは、メイン会場である国立競技場に灯された聖火を各県の競技会場でも灯すものです。各県はオリンピックの期待感を盛り上げるため、分火についてもリレーを行いました。開会式翌日の 10 月 11 日の 16 時 15 分に相模工業学園（現・湘南工科大学）に空輸された聖火は、出発式のあと、江の島を目指して 5 人のランナーにリレーされ、最終走者が棧橋からボートに乗って中央防波堤に造られた聖火台に移動し、17 時 30 分に厳かに点火されました。

4. ヨット競技会場として

ヨット競技会場は東京から遠隔地にあたるため、選手村の分村が必要でした。ただし、藤沢の宿泊施設では収容力が不足するうえ、当時は洋室を備えたホテルも限られました。そのため、一時は辻堂団地を早期落成して選手村とするプランも考えられましたが、最終的には大磯ロングビーチに決まりました。

競技は 10 月 12 日から開始されました。競技方法は円形の海域に設置されたブイの間を決められたコースで帆走するもので、7 日間で 7 回帆走した中で成績の良い 6 回のポイントを競いました。

オリンピックは当時の国民を熱狂させましたが、ヨット競技はなじみがなく、日本人の成績はスター級の 13 位が最高と振るわなかったのが実情です。それでも市民はオリンピックの開催を誇りとし、藤沢市も記録映画「東京オリンピック藤沢」を作成しています。この映画は現在、総合市民図書館の視聴覚ライブラリーに保管されており、視聴することが可能です。

おわりに

藤沢市が東京オリンピックの会場に選ばれたのは、湘南港の建設計画と一致した「時の運」に負うところがあります。ヨット競技は、当初横浜で検討されていたため、富岡海岸が米軍から返還されていたら、江の島が会場に選ばれることはありませんでしたし、そもそも片瀬東浜の浸食問題がなければ湘南港の築港はありませんでした。

藤沢市は、1957 年（昭和 32 年）から「東洋のマイアミビーチ」と謳われ、海水浴を中心に夏場の観光地として確立されつつありましたが、通年の観光地への脱皮を模索していました。オリンピックの開催で、江の島は一躍ヨットの基地としても知られるようになり、「海と藤沢」のイメージを全国に広めたのです。（澤内）

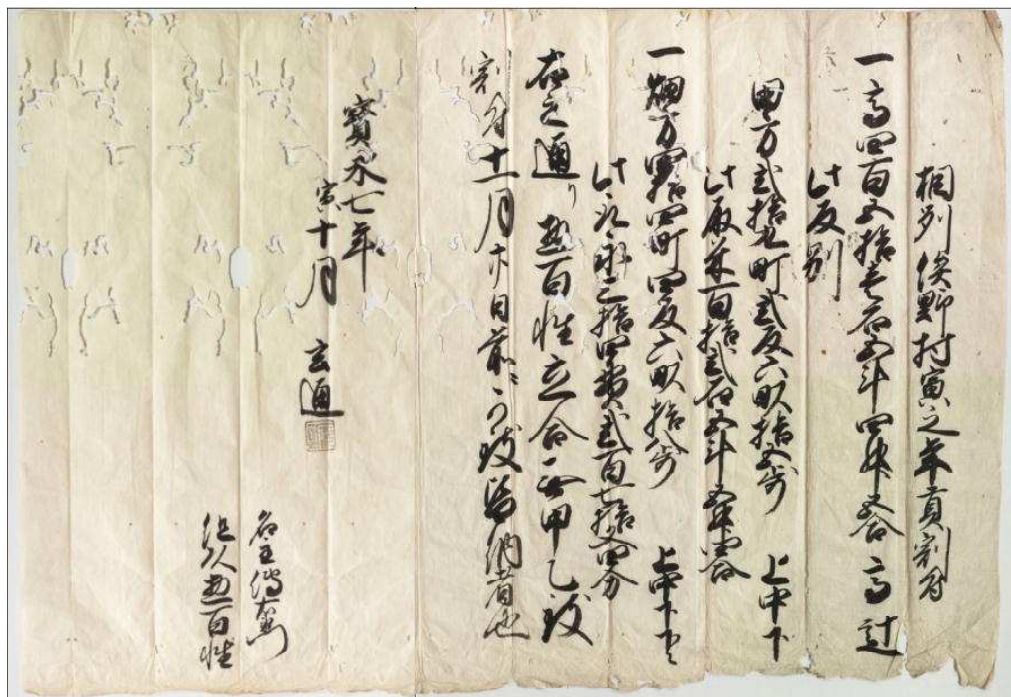


オリンピックヨット競技（広報アルバム No.23）

連載 古文書の読み方 第27回

江戸時代の年貢割付状と呼ばれる資料を見ていきます。年貢とは、領主から村に課せられた租税のことで、その通知書です。

この資料は、1710年(宝永7年)に相模国高座郡西俣野村(1行目の表題には「相州俣野村」とあります)に出されました。日付は後ろの方にあります。その下は差出人名を書く位置で、「玄通」は、当時の西俣野村領主旗本長谷川氏の名前です。



(西俣野史蹟保存会所蔵 目録稿 15集 №3)

その左下が宛名ですが、村と領主の身分関係を反映して、あえて低い位置に記されています。

2行目からが本文で、まず「高」とあります。これは、村の租税負担能力を米の生産量に換算したもので、検地という領主の測量にもとづいて、予め算定されました。村の総量であり、「高辻」の「辻」が合計を意味します。次に、田と畑の「反別」(面積)と徴収高が記されます。反別には、耕地の等級を示す文字「上中下

(下々)」がまとめて記され、各等級を集計した面積とわかります。徴収高は、田が「取米」、畑が「取永」(永は銭)とあるので、田畑で納めるものが異なることもわかります。

この資料では省略されていますが、田畑の等級ごとに面積と徴収高を書き上げたり、災害時の非課税措置などが記されたりすることが多く、数値も年により変わります。このため、複数の年貢割付状を比較すると、村の変化がわかることもあります。

最後は、村の百姓が皆で立ち会って力関係ではなく平等に配分するようという注意と、納付期限が記されます。(酒井)

<p>相州俣野村寅之年貢割付</p> <p>一高四百五拾壹石五斗四升五合 高辻</p> <p>此反別</p> <p>田方式拾九町式反六畝拾五歩 上中下</p> <p>此取米百拾式石五斗五升四合</p> <p>一畑方四拾四町四反六畝拾八歩 上中下下々</p> <p>此取永三拾四貫式百七拾文四分</p> <p>右之通り惣百姓立合無甲乙致</p> <p>割付十一月廿日前二可致皆納者也</p> <p>寶永七年 寅十月 玄通</p> <p>名主傳右衛門 組頭惣百姓</p>

編集後記 2020年の東京オリンピック開催が決まり、藤沢市も1964年の実績をもとに大会を支援する体制作りを進めています。1964年の資料か

らは市民の熱意と熱気が伝わりますが、次のオリンピックも藤沢が何らかの形で関わればと願います。(澤内)